

ポイント②：使用する色は背景で選び、高彩度は極力避けましょう。

明度、彩度が近い色同士は、色相が異なっても調和のある色の組み合わせになり、これをトーンと呼びます。

トーンを合わせることで、建物のまちなみのまとまりをつくることができます。

また、建築物や工作物が設置される場所には、必ず背景があり背景にも様々な色があります。

建築物や工作物の色を決める場合には、背景との関係性の中で、どう調和するか、どう顕在化するかを見極めるとともに、使用した色が景観全体にどのような影響を及ぼすかを考える必要があります。

海や空、植物の緑等の自然の色彩は、季節や時間によって変化しますが、建築物や人工物は塗り替え等をしない限り基本的に変化しません。

同じ色彩でも、外壁などの大面積に使うと、さらに鮮やかさや明るさが増して見えるため、周囲の景観へ与える影響が大きく注意が必要です。

豊かな自然環境に囲まれた渡嘉敷村において、海や空、植物の緑等の自然（主役）の色彩を生き生きとみせるために、建築物や工作物等の人工物の色彩はその色彩が持つ鮮やかさ（彩度6前後）よりも彩度を抑え、周囲に馴染むことが重要です。

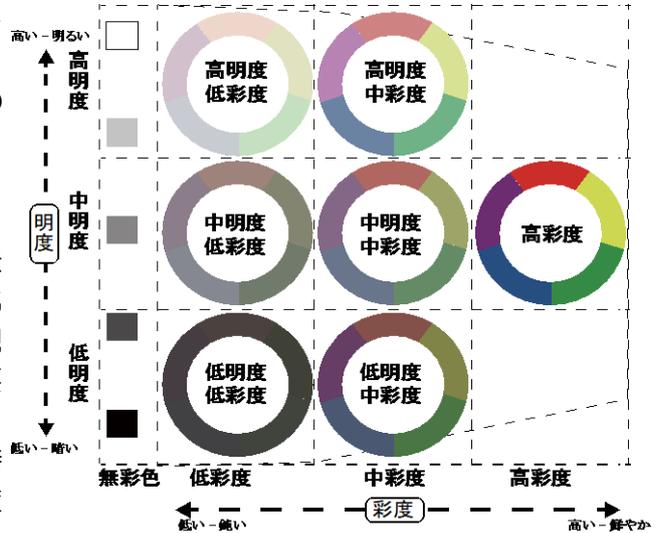


集落内では落ち着いたある高明度、低彩度のトーンが調和します。



海や空、植物の緑等の自然の色彩が主役となり、人工物の色彩は彩度を抑え、周囲に馴染む色彩にしましょう。

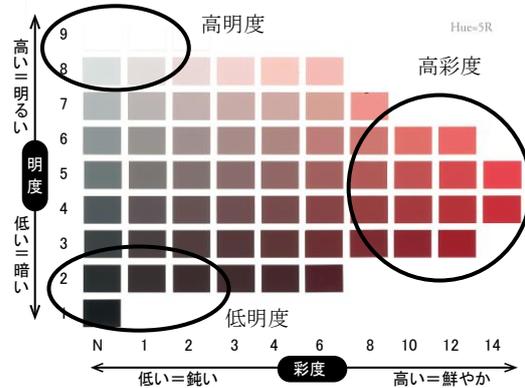
■ トーン分類



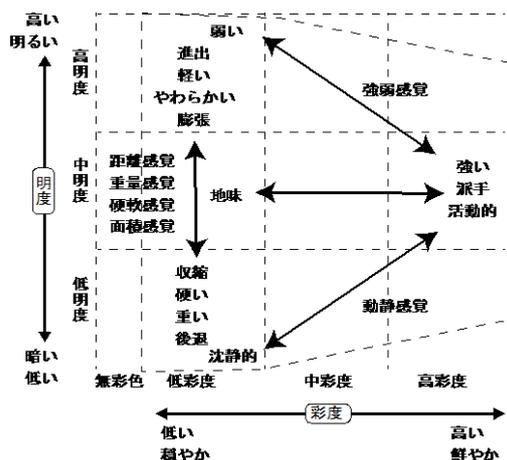
「高彩度」 彩度の高い色彩は、まちなみの中では調和せずに浮いてしまいます。色みが強いので、自然の中では、樹木などの緑よりも目立ってしまいます。
 「高明度」 明度の高い色彩は、漆喰、サンゴ礁の石積などとして古くから使われています。白っぽいので、自然の中では樹木等の緑との対比が大きく、存在感が際立ってしまうことがあります。
 「低明度」 明度の低い色彩は、まちなみの中では重い印象をあてられることもあります。

■ マンセル色見本表（マンセル表色系）

色相：5R(赤)



■ トーンによる心理的な変化



< 解説 >

ポイント③: 屋根は建築物の最上部にあり、展望台等の高い所からの眺望に影響があることから、色彩の使い方に十分気をつけましょう。

○屋根の色彩は、素焼赤瓦を除き、極端な低明度や高彩度、黒色を避け、統一感のある色彩にすることで、調和した屋根なみとなります。

○また、赤瓦などを活用することで、沖縄の文化を感じさせる景観となります。

素焼きの赤瓦屋根は、沖縄らしい風景の代表的な要素です。渡嘉敷村内の集落（渡嘉敷、阿波連）に赤瓦屋根が見られ、風土色豊かな景観となっています。また、新しい戸建住宅や村営住宅でも、赤瓦屋根が見られます。

一方、黒や灰色の瓦、青、緑などのカラー瓦は、沖縄の気候風土（自然光）では映えないため、周囲の屋根なみと違和感が生まれやすくなります。そのため、極端に暗い色や派手な色を用いないようにしましょう。また、陸屋根の防水塗装の場合も、周囲から見下ろされることに配慮し、低明度色や高彩度色は避けましょう。

【避けるべき例】



赤、青、黒、黄等のカラー瓦やトタン屋根

【望ましい例】



赤瓦や同系色の屋根で統一した屋根なみ

< 解説 >

ポイント④: 色彩基準をカラーチャートで示すと以下のようになります。

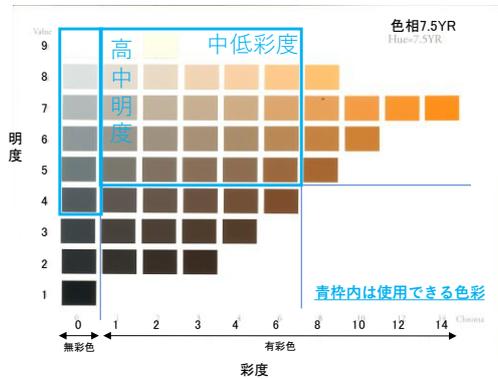
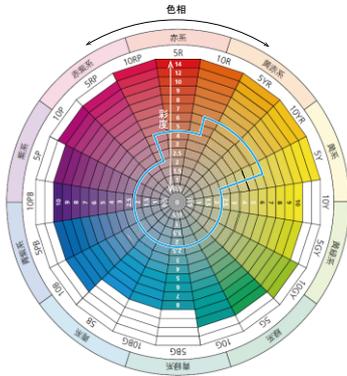
(「集落景観保全地区」、「自然景観保全地区」、「農地景観形成地区」)

	集落景観保全地区	自然景観保全地区	農地景観形成地区	島の玄関景観形成地区
建築物の屋根等の色彩	高～中明度かつ中～低彩度とし、黒色の使用を避ける 【パターン3】	自然素材に多い、R(赤)、YR(黄赤)、Y(黄)系の色相で、高～中～低明度かつ中～低彩度の色彩とし、黒色の使用を避ける 【パターン2】	高～中～低明度かつ中～低彩度とし、黒色の使用を避ける 【パターン4】	—

< 解説 >

高～中明度かつ中～低彩度とし、黒色の使用を避ける【パターン3】 <集落景観保全地区>

○屋根の色彩については、落ち着きを感じられ、水や緑、農地などの存在や周辺のまちなみを妨げないように配慮し、周囲の建築物との調和に配慮することが大切です。

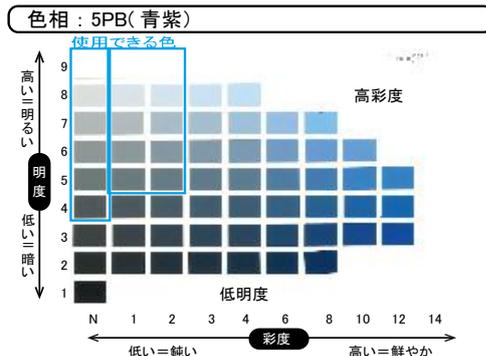
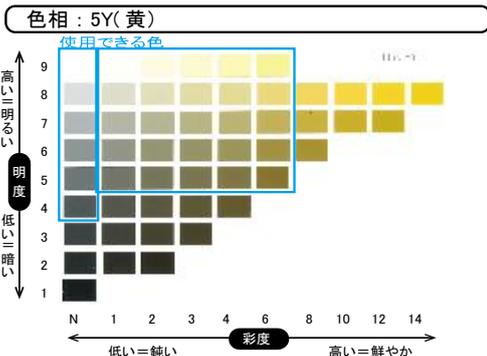
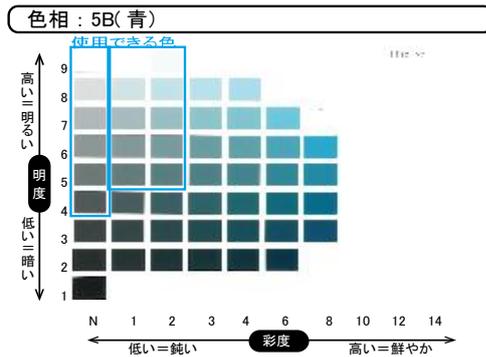
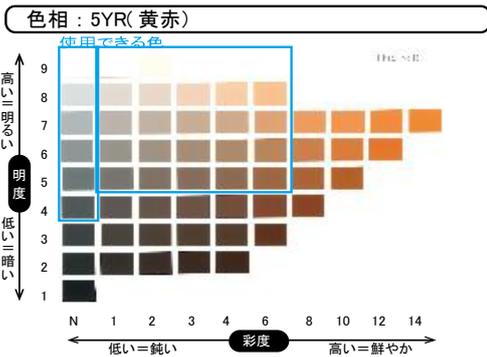
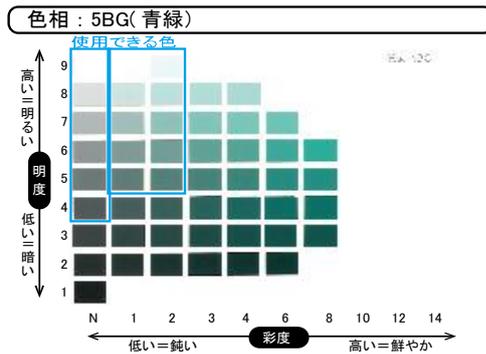
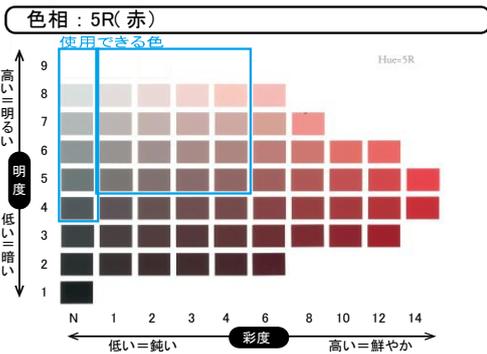


有彩色の使用できる範囲

色相	明度	彩度
0. 1R～10R (R系)	5以上	4以下
0. 1YR～5Y (Y・YR系)	5以上	6以下
その他 (5. 1Y・GY・G・BG・PB・RP系)	5以上	2以下

無彩色の使用できる範囲

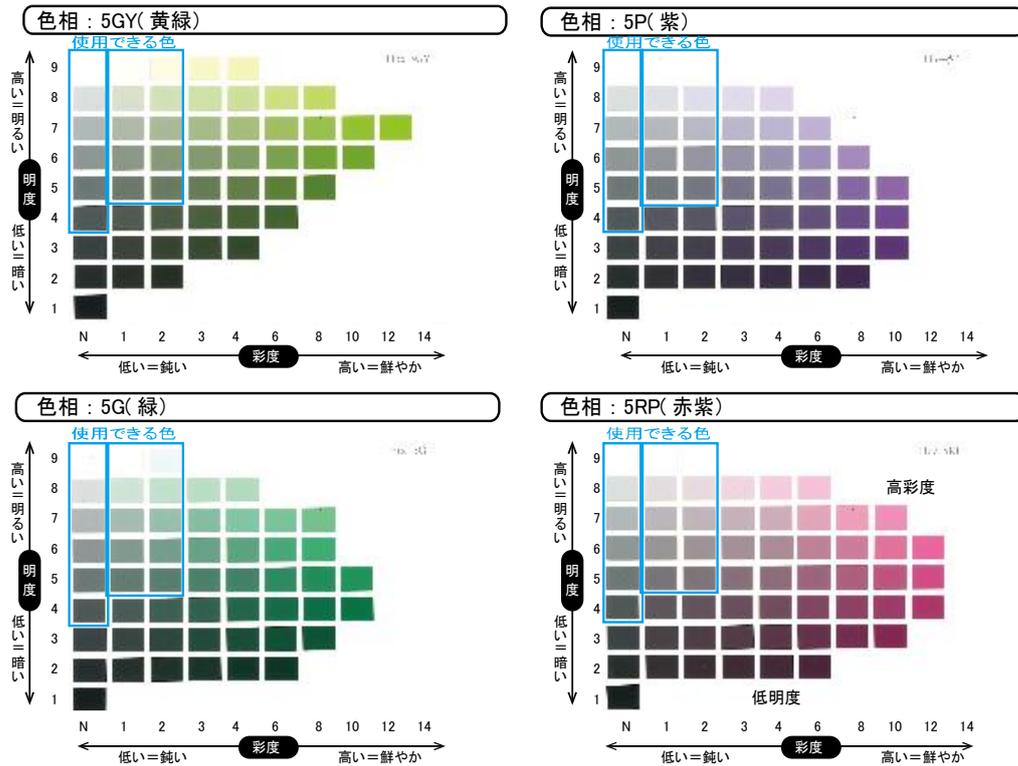
色相	明度
N	4以上



※色彩基準を示したカラーチャートは各色の面積が小さいため、実際の色彩よりも地味に見える場合があります。また、実際のマンセル値と図版等の色彩が異なる場合がありますのでご注意ください。

< 解説 >

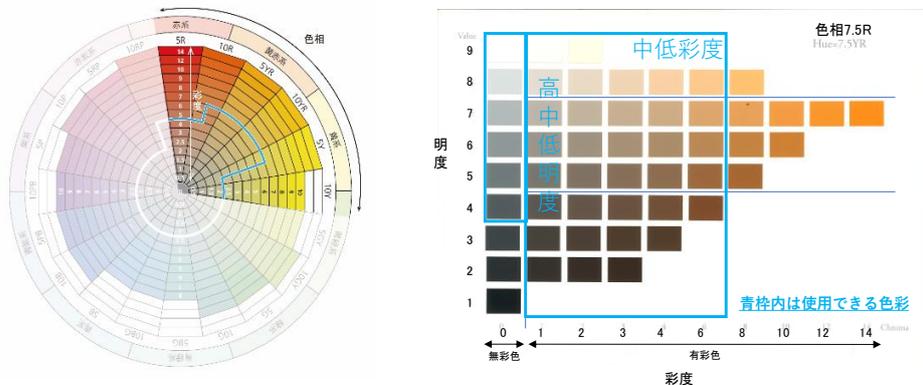
高～中明度かつ中～低彩度とし、黒色の使用を避ける【パターン3】 <集落景観保全地区>



< 解説 >

自然素材に多い、R (赤)、YR (黄赤)、Y (黄) 系の色相で、高～中～低明度かつ中～低彩度の色彩とし、黒色の使用を避ける【パターン2】 <自然景観保全地区>

- 「自然素材」とは、木材、漆喰、素焼きの赤瓦、地場の石材（石粉、琉球石灰岩の自然石）、土壁等です。土や岩、木の幹など、自然景観で大きな面積を占め一年中同じ色で在り続けるものは地味な色をしています。
- 屋根の色彩については、山並みなどの自然景観の色彩より、突出することがないように配慮することが大切です。また、落ち着きが感じられ、周辺の自然環境を妨げないように配慮し、R (赤)、YR (黄赤)、Y (黄) 系の色相としています。



有彩色の使用できる範囲

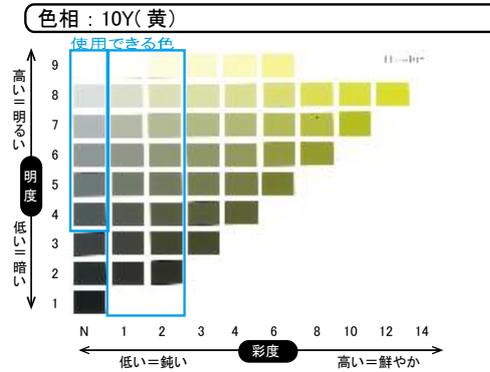
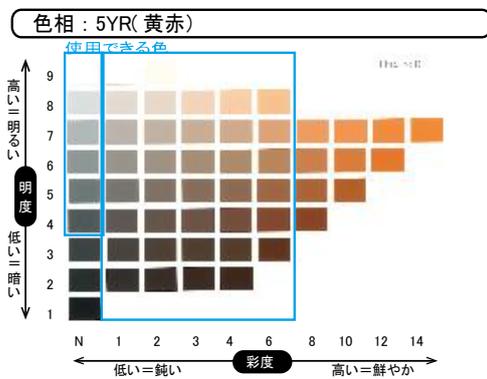
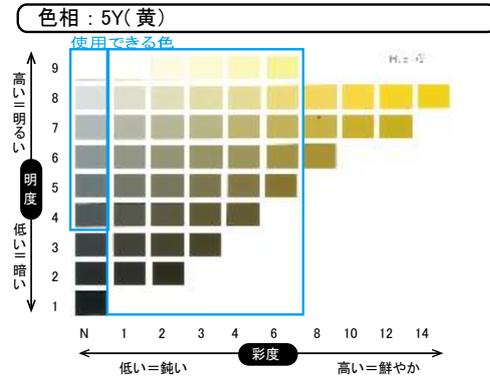
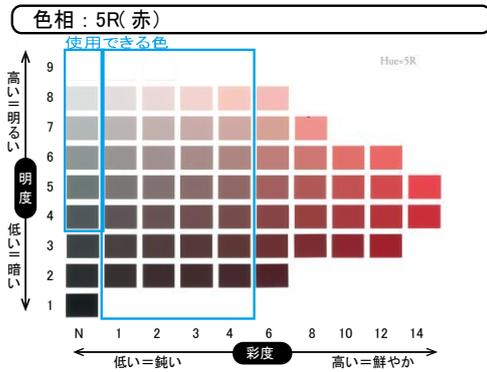
色相	明度	彩度
0. 1R～10R (R系)	全て	4以下
0. 1YR～5Y (Y・YR系)	全て	6以下
5. 1Y～10Y (Y系)	全て	2以下

無彩色の使用できる範囲

色相	明度
N	4以上

< 解説 >

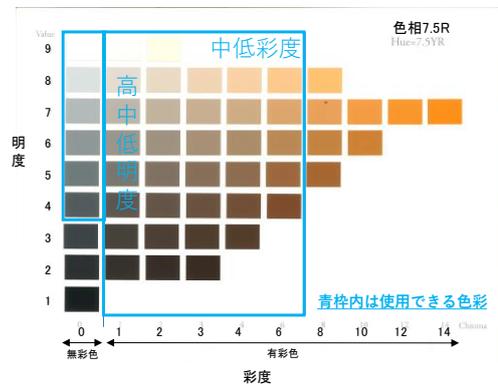
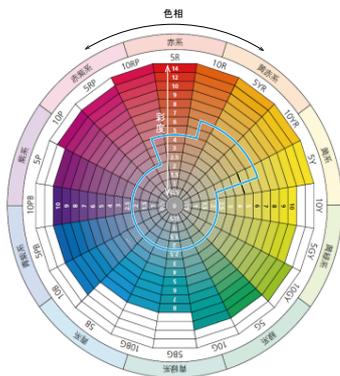
自然素材に多い、R (赤)、YR (黄赤)、Y (黄) 系の色相で、高～中～低明度かつ中～低彩度の色彩とし、黒色の使用を避ける【パターン2】 < 自然景観保全地区 >



< 解説 >

高～中～低明度かつ中～低彩度とし、黒色の使用を避ける【パターン4】 < 農地景観形成地区 >

○屋根の色彩については、落ち着きが感じられ、水や緑、農地などの存在や周辺の集落景観を妨げないよう配慮し、田畑とその背景に見える山並みをとともに引きだてながら、開放感や明るさの演出に配慮することが大切です。



有彩色の使用できる範囲

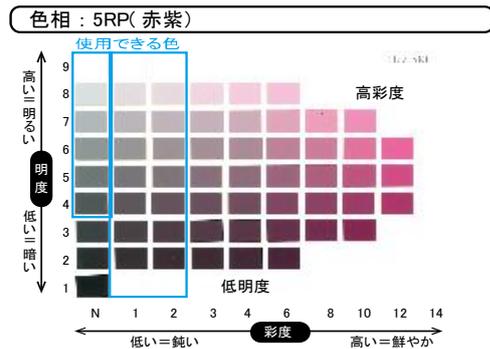
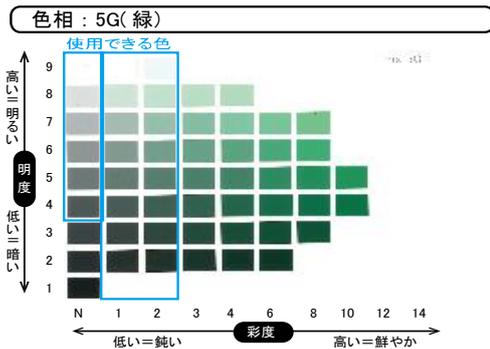
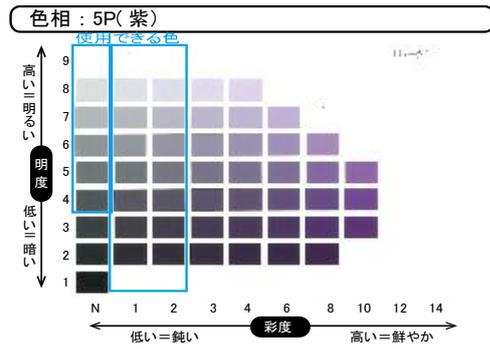
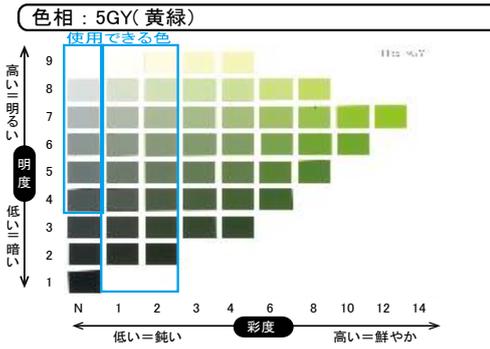
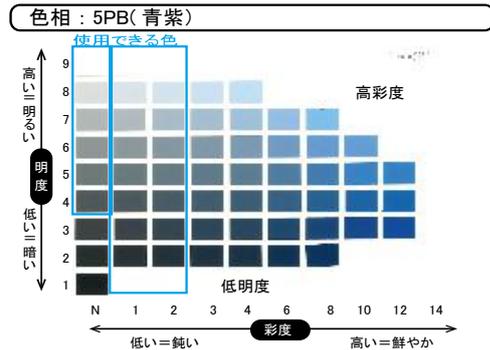
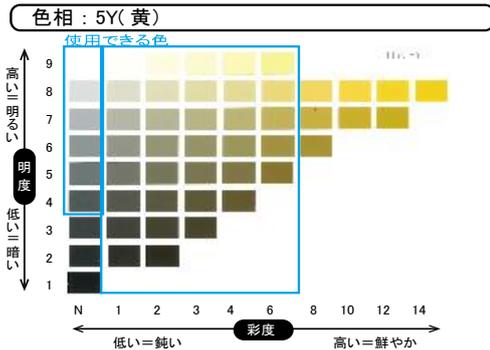
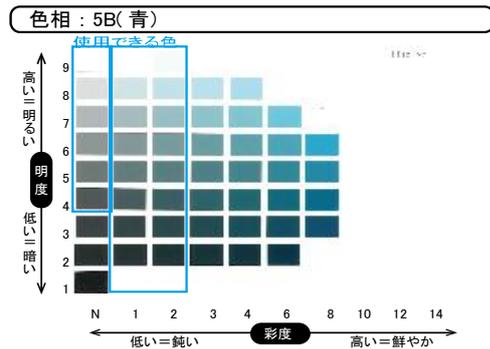
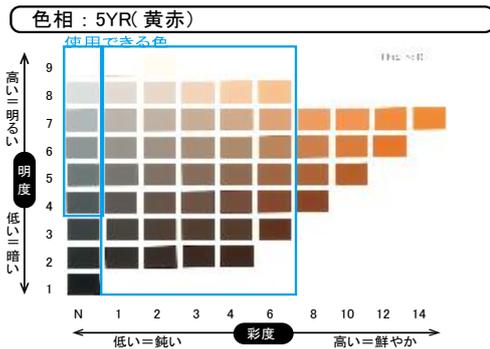
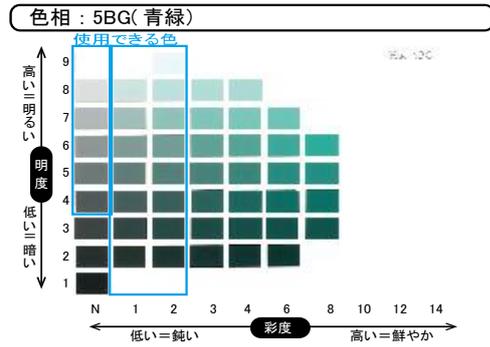
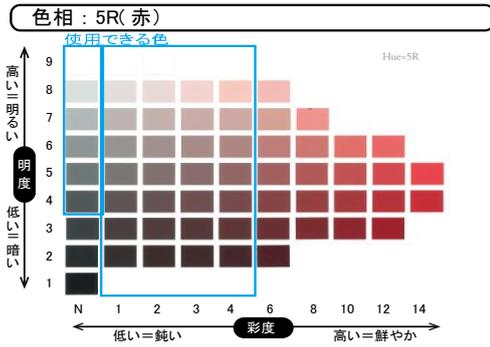
色相	明度	彩度
0. 1R～10R (R系)	全て	4以下
0. 1YR～5Y (Y・YR系)	全て	6以下
その他 (5. 1Y・GY・G・BG・PB・RP系)	全て	2以下

無彩色の使用できる範囲

色相	明度
N	4以上

< 解説 >

高～中～低明度かつ中～低彩度とし、黒色の使用を避ける【パターン4】 < 農地景観形成地区 >



※色彩基準を示したカラーチャートは各色の面積が小さいため、実際の色彩よりも地味に見える場合があります。また、実際のマンセル値と図版等の色彩が異なる場合がありますのでご注意ください。

<壁面の色彩基準>

建築物の外壁は周辺の集落景観に配慮し、落ち着いた色彩（マンセル値：明度8以上、彩度2以下）を基調とし、黒色の使用を避ける。但し、着色していない木材等の自然素材によって仕上げられるものや、外壁の一部にアクセントとして用いる色彩についてはこの限りではない。

地区区分

集落

島の玄関

店舗等で賑わいを創出するため、デザインのアクセントとして壁面や軒裏に上記以外の高明度・高彩度の色彩を使用する場合は、壁面と同系色にするよう努め、周辺景観との調和に配慮するとともに、使用面積は各立面の表面積の5%以下にとどめる。

地区区分

集落

建築物の外壁は周辺の自然景観に配慮し、自然素材に多い、R(赤)、YR(黄赤)、Y(黄)系の色相で、高～中～低明度かつ中～低彩度の色彩とし、黒色の使用を避ける。但し、着色していない木材等の自然素材によって仕上げられるものや、外壁の一部にアクセントとして用いる色彩についてはこの限りではない。

地区区分

自然

農地

< 解説 >

ポイント①：外壁は建築物の大部分を占め、背景の景観に影響があることから、色彩の使い方に十分気をつけましょう。

○沖縄の自然環境・風土になじみ、沖縄の自然光に映え、心身に心地良さを与えるよう、統一することで落ち着きのある色彩にしましょう。

・景観まちづくりにおける色彩調和の考え方は、「類似色調和」「色相調和」「トーン調和」の3つの手法があります。背景の景観との全体的な調和を念頭におきながら、これらの色彩調和の手法を踏まえて、色彩を考えましょう。

近い色でそろえた配色 【類似色調和】



【特徴】

色みや明るさ・鮮やかさが似ている色でそろえた配色です。最も統一感を得やすく、落ち着いた景観にまとめることができます。一方で、統一しすぎると、単調になる場合があるため注意が必要です。「自然が豊か」や「昔ながらの家なみ」の地域では景観がまとまります。

色み（色相）をそろえた配色 【色相調和】



【特徴】

色みに共通性を持たせながら、明るさ・鮮やかさに変化をつける配色です。例えば、赤系・黄系などの暖色系の色みでそろえることで、暖かい雰囲気のある景観にまとめることができます。適度に個性・賑わいを演出できます。

明るさ、鮮やかさをそろえた配色 【トーン調和】



【特徴】

色調をそろえながら、色みに変化をつける配色です。異なる色み（色相）であっても、「淡い色（高明度、低彩度）」など、トーンが類似するもので統一することで、全体として色彩に落ち着きを持たせながら、色みの違いにより適度に変化のある景観にまとめることができます。

ポイント②：「基調とする」とは、その壁面等の中心となる色です。基調色以外では、低明度の補助色や高彩度のアクセント色を決められた範囲内で使用することができます。

●「基調色」(ベースカラー)
全体面積の大部分(70%程度)を占める色のことをいいます。この基調色は、建築物全体のイメージを支配します。単色の場合は基調色(ベースカラー)のみとなります。地区ごとの色彩基準に適合させましょう。

●「強調色」(アクセントカラー)
全体面積の5%程度の小さな面積で使用される色のことをいいます。建築物全体を引き締めたり、きわ立たせたり、全体のバランスを強調したりします。視線を集中させたり、装飾効果もあります。(高彩度の使用可)

●「補調色」(サブカラー)
全体面積の25~30%程度を占める色のことをいいます。基調色を引き立てたり、建築物を引き立てたりして、変化や特徴をつける色のことです。

ポイント③：色彩基準をカラーチャートで示すと以下ようになります。

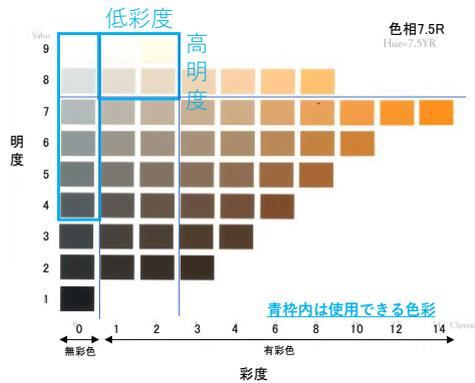
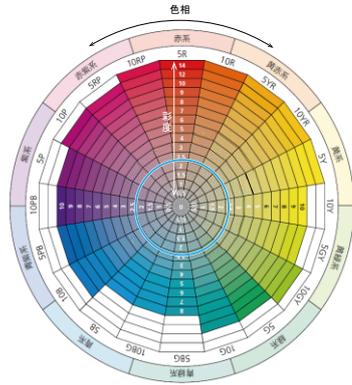
(「集落景観保全地区」、「自然景観保全地区」、「農地景観形成地区」、「島の玄関景観形成地区」)

- 「集落景観保全地区」及び「島の玄関景観形成地区」では、沖縄の自然環境・風土になじみ、沖縄の自然光に映え、心身に心地良さを与えるよう、落ち着いた色彩として「明度8以上」、「彩度2以下」の淡い色を基調とします。
- 山並み等の「自然景観保全地区」及び田畑が広がる「農地景観形成地区」では、周辺の自然環境を妨げないように配慮し、植物の生きた緑等の自然の色彩が引き立つようにR(赤)、YR(黄赤)、Y(黄)系の色相とします。
- 高彩度は目立つため、すべての地区で基調色として使用することを禁止します。また、無彩色である黒色(明度4未満)も同様に目立ってしまうため、すべての地区で基調色として使用することを禁止します。

	集落景観保全地区	自然景観保全地区	農地景観形成地区	島の玄関景観形成地区
建築物の壁面の色彩	建築物の外壁は周辺の集落景観に配慮し、落ち着いた色彩(マンセル値：明度8以上、彩度2以下)を基調とし、黒色の使用を避ける。但し、着色していない木材等の自然素材によって仕上げられるものや、外壁の一部にアクセントとして用いる色彩についてはこの限りではない。 【パターン1】	建築物の外壁は周辺の自然景観に配慮し、自然素材に多い、R(赤)、YR(黄赤)、Y(黄)系の色相で、高～中～低明度かつ中～低彩度の色彩とし、黒色の使用を避ける。但し、着色していない木材等の自然素材によって仕上げられるものや、外壁の一部にアクセントとして用いる色彩についてはこの限りではない。 【パターン2】		建築物の外壁は周辺の集落景観に配慮し、落ち着いた色彩(マンセル値：明度8以上、彩度2以下)を基調とし、黒色の使用を避ける。但し、着色していない木材等の自然素材によって仕上げられるものや、外壁の一部にアクセントとして用いる色彩についてはこの限りではない。 【パターン1】

< 解説 >

建築物の外壁は周辺の集落景観に配慮し、落ち着いた色彩（マンセル値：明度8以上、彩度2以下）を基調とし、黒色の使用を避ける。【パターン1】 <集落景観保全地区> <島の玄関景観形成地区>

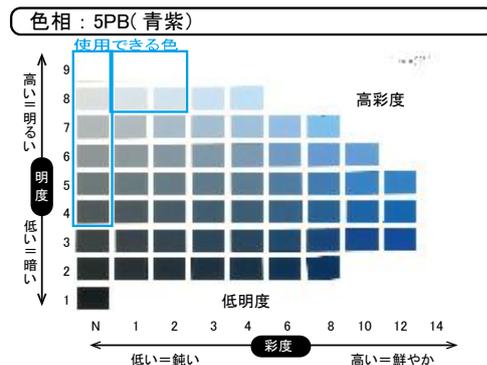
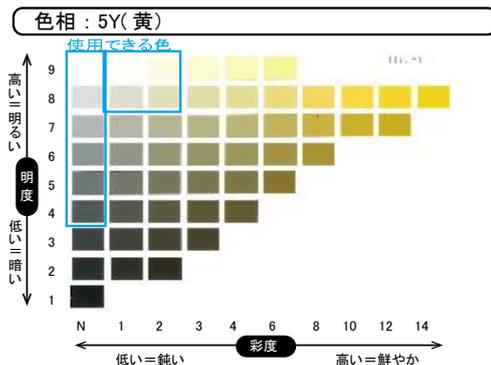
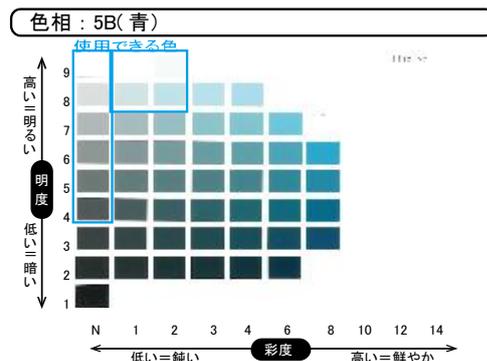
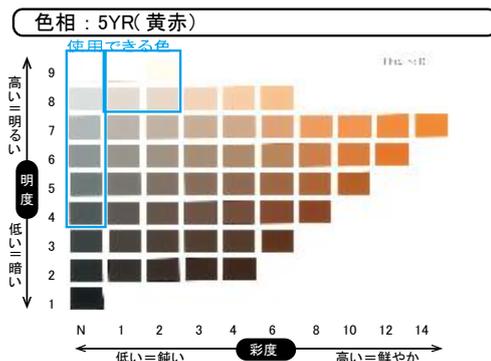
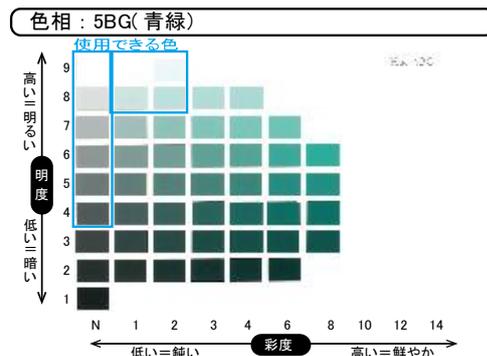
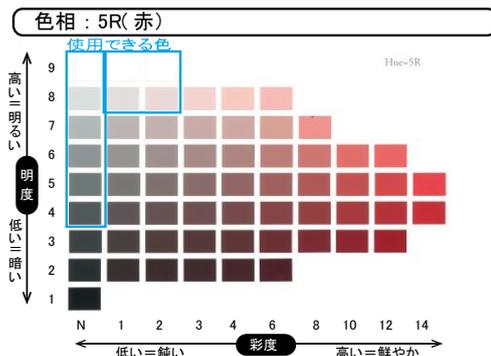


有彩色の使用できる範囲

色相	明度	彩度
0. 1R~10R (R系)	8以上	2以下
0. 1YR~5Y (Y・YR系)	8以上	2以下
その他 (GY・G・BG・PB・RP系)	8以上	2以下

無彩色の使用できる範囲

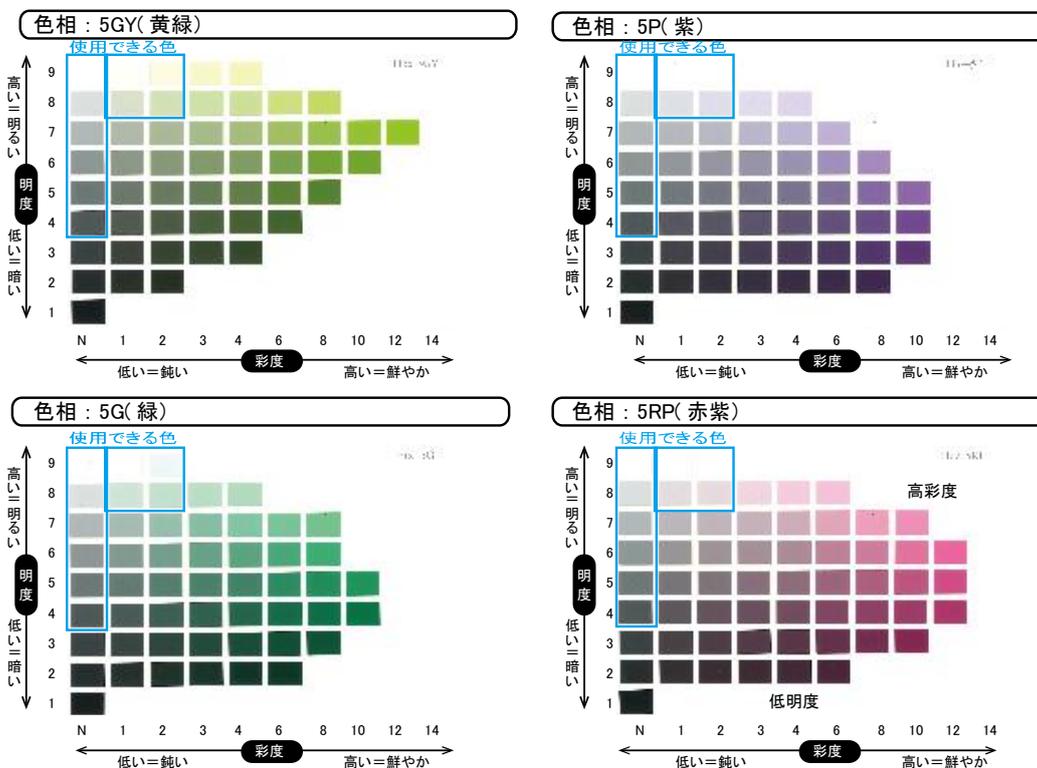
色相	明度
N	4以上



※色彩基準を示したカラーチャートは各色の面積が小さいため、実際の色彩よりも地味に見える場合があります。また、実際のマンセル値と図版等の色彩が異なる場合がありますのでご注意ください。

< 解説 >

建築物の外壁は周辺の集落景観に配慮し、落ち着いた色彩（マンセル値：明度 8 以上、彩度 2 以下）を基調とし、黒色の使用を避ける。【パターン 1】 <集落景観保全地区> <島の玄関景観形成地区>



※色彩基準を示したカラーチャートは各色の面積が小さいため、実際の色彩よりも地味に見える場合があります。また、実際のマンセル値と図版等の色彩が異なる場合がありますのでご注意ください。

< 解説 >

自然素材に多い、R (赤)、YR (黄赤)、Y (黄) 系の色相で、高～中～低明度かつ中～低彩度の色彩とし、黒色の使用を避ける【パターン 2】 <自然景観保全地区> <農地景観形成地区>

⇒色彩基準を示すカラーチャートは p 52～53 を参照してください。

< 解説 >

ポイント④：基調色の色彩基準で例外とする場合があります。

<基調色の例外>

○着色していない木材、石材、素焼きなどの焼き物等の沖縄らしい自然素材が持つ固有の色彩については、協議・検討のうえ、色彩基準の適用が緩和されることもあります。

- ・木材・石材・コンクリート・ガラス・素焼き（顔料を使用しないものに限る）・金属・ガラスの自然素材が持つ固有の色彩については色彩基準の対象外となります。ただし、タイルや焼き物については、人工的に着色したものがあため、基準に沿って色彩を選択する必要があります。

○集落景観保全地区及び島の玄関景観形成地区において、基調色は淡い色彩を基準としていますが、背景が暗く濃い樹林地等の場合、白く際立ってしまい周辺に影響を及ぼすことも考えられます。その場合は、背景とのバランスや近距離からの圧迫感や威圧感がないか等、十分な協議・検討したうえ、明度や彩度を落とした色彩を使用することも可能です。